史跡訪問

城山に残る毛利神社

毛利神社は、昭和三年十一月に佐伯町と毛利家関係者との協力で創建された。建物自体は昭和二十年四月二十六日の空襲により全壊した。毛利神社の右手横に着弾とのことである。その後、本殿への石殿は長い間残されている。

この小さな社殿に一枚の石板が残されている。石板には狛犬壱對を奉納した六人の名前が残されていた。この奉納者と毛利神社について若干調べてみた。

《毛利神社の建設について》

毛利神社の建立については、佐伯図書館資料「佐伯新聞・昭和三年、四年版」を参考にした。

昭和三年十月二十八日号「寛龍公を祀る城山毛利神社」に「昨年九月二日、佐伯市長小田部隣及び片岡正路両氏以下有志五十八名の連署で出願した、旧佐伯藩祖毛利高政並びに寛龍院殿高標両公を祀る毛利神社に就いて、本日

十八日佐伯町長宛許可の内報があったが、翌十九日に到り、官報を以て愈々許可された旨の発表を見た。

城山山頂の旧天主臺に造営する該神社拝殿は許可の令書到達次第本工事に着手の予定であるが、すでに一切の準備が成っているので、最短期間内に完成し、本年内もしくは明年早々神体を迎えて、盛んなる鎮座大興行に内定しているという。尚、社格については未だ判然としないが、祭神は毛利氏八代の英主贈従三位伊勢守朝臣高標一体だとも言われている。また、城山の山頂一帯は今後神域の境内となるので、国法に依り樹木の伐採が禁止されるはず。

続いて十月四日号には、「毛利氏八代英主寛龍院殿高標公を祀る毛利神社も過般（先般）内務大臣より建築を許可され、目下城山山頂天主臺址に拝殿造営中であるが、神社基金の募集の方法も既に決定したので、ここに一切の準備なり、速くも明春梅花爛漫の候をトして盛大なる鎮座式挙行までのぼっている。」

翌四年三月四日号には「旧佐伯藩八代英主贈従三位毛利高標公を祀り、また藩祖従三位毛利高政公を祭祀せんとする城山山頂の毛利神社は、すでに工事の八分以上を進工したが、本月中旬頃に竣成の予定である。尚高政公墓前策命使（さくめいし）として久米知事が参向することになっている。」と書かれている。

※策命使＝詔書を出して爵位や封土を与える人

その後は毎日のように記事が載せられている。

要約すると

三月三十一日　藩祖高政公へ贈位の策命
　　新館の祓い式実施

四月　四日　青年団三十名による白丁奉仕により移霊式　五所明神参道より御輿を担ぎ中村本通り、旧大手御門を経て城山山頂の宝殿へ移御（毛利社神霊渡御式）

四月　五日　久米策命使等二百五十名による従三位高政公墓前祭挙行。

四月　六日　毛利神社鎮座式　神官の修祓（しゅうばつ）

このように毛利神社の建設は、久米大分県知事を始め、小田部隣佐伯町町長臨席の中で実施された。

この毛利神社鎮座式に先立つ、昭和三年十月二十三日に毛利高範公五女喜代子姫（二十歳）と筑波藤麿氏の結婚

式が行われた。毛利高範氏から毛利家奉公財団へ金三百円が寄贈された。

十一月二十二日には佐伯町町歌制定式が佐伯小学校講堂で行われた。町歌は市民から詩を募集し西条八十が選考、近衛秀麿氏が作曲した。

《毛利神社寄進の灯籠について》

毛利神社に奉納された狛犬は、佐伯史談会会員林寅喜氏が会誌二二二号に「毛利神社にあった狛犬のこと」と題して投稿されている。（会誌参照）

ここでは、その狛犬を寄進した方々について調べた内容をまとめた。この毛利神社に残された石板には次のような方々の名前があった。

・正五位　毛利　高棟
　　毛利富士子
・男爵夫人　黒田　久子
・公爵夫人　近衛千代子
・子爵夫人　近衛　泰子
・侯爵夫人　筑波喜代子

の六名である。

城山山頂の毛利神社跡に残された奉納者の氏名

これらの人々を調べてみると全ての方が華族であった。明治維新になり旧位などで公爵・侯爵・伯爵・子

爵・男爵と位置づけられている。まずその位について述べてみよう。

明治二年（一八六九）六月十七日、版籍奉還と同日に出された行政官布達で「公卿諸侯の称は廃し華族とあらためる」となり、これまでの公家一三七家、諸侯二七〇家に明治維新後に新たに公家、諸侯となった合計四二七家が華族として登録された。明治十一年には華族の統制を行うため華族の格付けがなされた。明治十七年（一八八四）に華族の爵位が決定した。

・公爵＝公家から五摂家（近衛家・九条家・二条家・一條家・鷹司家）・武家から徳川家宗家、他に三条家、岩倉家、島津家宗家、玉里島津家、毛利家

・侯爵＝清華家　徳川御三家　十五万石以上の大名家　琉球国王尚氏、木戸家、大久保家

・伯爵＝大臣家、大納言　堂上家　徳川御三卿　五万石以上の大名　東久世家　対馬　平戸松浦家　両大谷家（東西本願寺）及び伊藤博文、黒田清隆、井上馨、西郷従道、山県有朋、大山巌などの維新の元勲

・子爵＝堂上家、維新前に諸侯だった大名家、近衛秀麿家・徳川武定家、松平慶民　その他明治維新時に活躍した家

・男爵＝明治維新後に華族になったもの、押小路家、壬生家、大社の世襲神職家、浄土真宗系の世襲門跡　琉球の伊江家、今帰仁家など

では、石板に書かれている六名の人物について考察しよう。

○正五位子爵　毛利　高棟（たかむね）

佐伯藩十三代藩主毛利高範（肥後宇土藩主細川行真の次男・養子）の次子、長女久子、次女千代子、三女泰子、五女喜代子、長男高亮（夭折）の七人兄弟姉妹。毛利式速記術を取得。十四代を継ぐ。

○毛利富士子　毛利高棟の奥方（子爵夫人）

○男爵夫人　黒田久子　佐伯藩主毛利高範の長女

筑前福岡藩十二代藩主、初代福岡知藩事黒田長知（ながとも）の四男、黒田長和の奥方

○公爵夫人　近衛千代子

佐伯藩主毛利高範の次女、母は井伊直安の長女隆子

昭和期の政治家、近衛文麿の妻

○子爵夫人　近衛　泰子

佐伯藩主毛利高範の三女　大正九年（一九二〇）指揮者兼作曲　家の近衛秀麿氏と結婚、昭和三十一年（一九五六）離婚　一男二女の母

○侯爵夫人　筑波喜代子

毛利高範の五女　皇族、筑波藤麿（藤麿王）の奥方三男一女をもうける。息子に筑波常治、筑波常遍（常秀）、筑波和敏がいる。娘の筑波登喜枝は平戸松浦藩主の奥方である。

《筑波家系図》

毛利喜代子 ＝ 筑波藤麿
- 筑波和俊
- 筑波常秀
- 筑波登喜枝
- 筑波常治

九条範子 ＝ 筑波藤麿
- 鹿島萩麿
- 葛城茂麿

山階宮菊麿王 ＝ 島津常子
- 武彦王（山階宮・山階武彦）
- 芳麿王（山階鳥類研究所創設）
- 安子女王（淺野長武妻）

《近衛家系図》

毛利千代子 ＝ 近衛文麿

前田衍（さわ） ＝ 近衛文麿

近衛篤麿 ＝ 前田貞（もと）
- 武子（大山柏夫人）
- 秀麿（音楽家・衆議院議員） ＝ 毛利泰子
- 直麿（雅楽演奏家）
- 忠麿（水谷川家・春日大社宮司）

《黒田家系図》

毛利久子 ＝ 黒田長和
- 黒田定子

黒田理玖 ＝ 黒田長和
- 黒田長成
- 黒田長敬
- 黒田禎子

黒田長知（藤堂高猷三男）

この毛利神社に寄進した六名の人達は佐伯藩十三代毛利高範の子ども達である。

・武彦王（明治三十一年～昭和六十二年）
山階宮菊麿王の第一王子、明治四十一年父逝去に伴い皇族山階宮家を継ぐ

・芳麿王（明治三十三年～平成元年）
山階宮菊麿王の第二王子、大正九年臣籍降下
山階の家名と侯爵の爵位を賜う。
山階鳥類研究所の前身、山階家鳥類標本館設立

・藤麿王（明治三十八年～昭和五十三年）
山階宮菊麿王の第一王子、昭和三年臣籍降下筑波姓を賜る。昭和二十一年より靖国神社五代宮司

・萩麿王（鹿島萩麿・明治三十九年～昭和七年）
山階宮菊麿王の第四王子、昭和三年臣籍降下鹿島姓を賜る

・安子女王
山階宮菊麿王の第一王女、侯爵淺野長武氏夫人

・茂麿王（葛城茂麿・明治四十一年～昭和二十二年）
山階宮菊麿王の第五王子、昭和四年臣籍降下葛城の姓を賜る。

・筑波　常治（昭和五年～平成二十四年）
藤麿長男・早稲田大学教授（科学史家）

・筑波　常秀（藤麿次男・昭和十年～）
真言宗山階派勧修寺第四十五世・門跡僧侶

・筑波登喜枝（藤麿長女・旧平戸藩主松浦擇夫人）

・筑波　和俊（藤麿四男・宮内庁掌典）

参考資料

・佐伯史談二二二号
・佐伯新聞復刻版　昭和三・四年